〈翻　訳〉

フランスの革命運動　一八一五―七一(六)

ジョン・プラムナッツ
高村忠成(訳)

第六章　パリ・コミューン

第一節　パリとフランスとの争い

(一)　国防政府と急進共和派

皇帝がセダンで捕虜になった三日後の九月四日、第三共和政がパリで宣言された。群衆が議会になだれ込み、共和派の議員たちを市庁舎へ連れて行った。そしてその日の夕刻六時に、国防政府が樹立された。ファーブル、シモン、フェリ、トロシュ、ピカール、ロシュフォールの六人からなる新政府は、ロシュフォールを除いて、穏健共和派から構成されていた。それは、一八四八年の状況とは違っていた。一八四八年当時は、権力を握っている議会の外にあって、パリの新聞とか首都で人気のある指導者たちが政府を構成した。ロシュフォールは、新政府の中で、政府よりもっ

と過激な共和派や首都の労働者たちから実際人気をえていた唯一の人物であった。しかしロシュフォールは、孤立していた。また、政府部内での自分の脆弱さを自覚していた。彼は他の閣僚に対して影響力を発揮できなかった。彼はいかにして同僚の信頼をかちえ、彼らから譲歩をえるかという策にたけているような人物ではなかったのである。彼は最初から、自分が身を寄せている政府とは敵対していた。もし彼に力があれば、同僚たちに逆っても、政府と対立していったにちがいない。

共和派の中でも急進派は、すぐに新政府に不信感を懐き始めた。インターナショナルのパリ各地区からなる連合評議会は、他の急進的な団体とともに、九月一一日、パリの「二〇地区中央委員会」[1]を形成した。各地区は委員会を作り、各委員会からそれぞれ中央委員会に、四人の代表を送るように要請された。この計画を推進した人たちが考えていたことは、中央委員会が国防政府を監視し刺激するように、各委員会が地方自治体を監視し刺激するということであった。

中央委員会は当初は、新政府に対して、少し疑念はもっていたが敵対的というわけではなかった。しかし新政府が設立されると、パリでもっとも力があり、人気がある指導者をもつ過激な共和派が穏健共和派を信用していない、ということが判明した。すべてのジャコバン派や革命家が中央委員会を支持していたわけではなかったのである。ブランキやドゥレクリューズ、ピア、フルーランスのような過激派たちは、インターナショナルを嫌悪しており、そのため彼らは、インターナショナルに支持された各委員会とは無関係を装った。だがこうした結果、彼らは国防政府に対する評価を少しも変えようとはしなかった。彼らは国防政府を自分たちの新聞やクラブで攻撃したのである。ブランキが『祖国は危機に瀕す』という機関紙で、ドゥレクリューズが『覚醒』、ピアが『戦闘』で、それぞれ非難した。

① 一〇月三一日の暴動

フランスは戦争中であった。中央委員会も、それとは一線を画していたジャコバン派や革命家たちも、結局は戦争

にどうかかあうかということに関心をもっていた。政府を非効率的であるといって非難し敵対していたジャコバン派や革命家たちと、軍事的な状況との間には関連性があるということが、一月二八日の休戦以前の二つの暴動の期日を見ると明確になる。

一〇月三〇日、メッツでバゼーヌが捕虜になったとのニュースがパリに届いた。翌日暴動が起こり、ジャコバン派とブランキ派が市庁舎を占拠し、新政府を宣言した。フルーランス、ピア、ドゥレクリューズ、そしてブランキらがすべてそれに参画した。国民公会を真似て、彼らは公安委員会を形成し、かつできるだけ早くパリにコミューンが生まれるであろうと発表した。だが、暴徒による市庁舎の占拠はそう長くは続かなかった。

国民軍の数部隊とパリ駐留のブルターニュ人の二大隊が彼らを追放し、国防政府を再建したのである。暴徒の指導者たちには、当初恩赦が約束された。しかし、彼らはまだ暴動を計画しつつあるのではないか、という根拠が薄弱だが疑いが出され、政府はそれを口実として約束を反故にしてしまった。その上国防政府はまた、自分たちの力の源を暴力行為、すなわち九月四日の反乱に置いていた。国防政府も、一〇月三一日の反乱者たちを上回る、フランス統治のためのよりよい権利をもっていなかったのである。

一〇月三一日の反乱者たちに対する国防政府の処置は、自分たちに何の利益ももたらさなかった。ブランキは逃亡し、ピアとドゥレクリューズに対する証拠は不十分と判明した。そして暴動を主導したフルーランスは一二月になって逮捕された。国防政府は、その貧弱さと無能性を露呈しつつあった。すなわち、政府関係者は他人を処罰することに決めたが、その理由は何のことはない、かつて自分たち自身が行った行為と同じであるということがわかり、彼らを罰するのは不可能であると気づいたのである。

しかし、一〇月三一日の暴動は、対立の渦中にある両当事者には予測のつかない結果を招くことになった。二〇区中央委員会が突然消滅し、それを設立した人たちが、会員を急激に増大させていたジャコバンとブランキ派のクラブ

に身を寄せていったのである。蜂起は失敗した。しかし、かといって政府に対する野党の力は弱まらなかった。いなかえって、蜂起によって野党は以前よりも団結を強めたのである。

政府は威信を回復し、強く望んでいた正統な立場をえるために、一一月三日、パリで人民投票を計画準備した。五百五十万人が政府に投票し、反対票はわずか六万票であった。しかし、人民投票はあまり評判はよくなく、人々を誤まった方向に導いてしまう恐れがある。人民投票では有権者には代替の選択肢はなく、たんに既成事実を認めさせるだけだからである。

一一月四日の都市の選挙は、パリ市民が、自分たちの政府と戦争の遂行についてどのように考えているのかを端的に物語っている。二〇区のうち一七区で、政府派の候補者が選出された。すなわち、野党が勝ったのは、一八、一九、二〇区だけで、いずれもパリの労働者の地区であった。おそらく多くの地区は、国防政府を信頼していなかったのであろうが、ただパリの大部分の人々は、プロシア軍の侵入を前にして、国防政府に投票することが自分たちの義務だと感じていたのであろう。

② 一月二二日の暴動

二度目の暴動が一月二二日起こった。それは、パリ国民軍がブザンヴァルへ向かって悲劇的な出撃をした三日後のことであった。国民軍はその地で敗退した。国民軍のうち何隊かの過激な大隊が市庁舎の外に集まり、庁舎内に代表を送り、パリのコミューン議会を直接選挙で選ぶように要求した。その要求は拒否された。すると何人かの国民軍兵士たちは、市庁舎内の正規軍に発砲し、正規軍もそれに応酬した。国民軍の大隊とその回りに集まっていた群衆は、一目散に退散したが、約五〇体ほどの死体がそこに残された。暴動のあと政府は、過激な左派に対してさらに激しい弾圧を加えた。いくつかの政治クラブは閉鎖され、二つの重要な新聞、ドゥレクリューズの『覚醒』とピアの『戦闘』は発行停止となった。

(二)　休戦条約

この二度目の暴動から六日後の、一八七一年一月二八日、パリ包囲の一三五日目、ビスマルクは、譲歩してフランスに休戦条約を認めた。フランス人は、国民議会を選挙し、戦争の継続か中止かを決めてよいことになった。ただしフランスは、パリ防衛の要塞を明け渡し、一万二千人を除いて正規軍をすべて武装解除しなければならなくなった。だが国民軍の解除は求められなかった。休戦協定によってフランスは、その協定の協議にあたった人たちがどのような意図をもっていたにせよ、武装は解除され、戦争の継続は不可能となった。だが、武装戦力である国民軍の存続は認められた。それは脆弱で、とてもプロシア軍と戦えるものではなかったが、しかし、もしその気になれば、どのようなフランス政府であれ、それに反抗するだけの強さはあった。

①　国民軍

ナポレオン三世は、国民軍を嫌っていた。そのためそれは無力と化していた。彼の退位後、国民軍は復活した。プロシア軍の電撃的勝利は、フランス正規軍の威信に泥を塗った。第二帝政崩壊の二日後、九月六日、国防政府は国民軍六〇大隊の編成を認めた。それは秩序を維持するためではなく、敵と戦うためであった。六〇大隊どころではなく、すぐに一九四大隊が編成された。それは約三〇万人からなる大部隊であった。愛国心からだろうと、飢えを避けるためからであろうと、あらゆる人々が国民軍に入隊できた。包囲期間中、パリには大量の失業者があふれたため、国民軍の兵士一人一人が受けとる一日一フラン五〇セントは、労働者階級の家族を飢えさせないための唯一の手だてであった。

七月王政から第二共和政の時代、国民軍は中産階級の軍隊であった。兵士は各人が自分の装備をもっていた。国民軍がなすべき唯一の任務は、労働者をしめ出すことであった。しかし、一八七〇年に復活した国民軍の目的はパリ防衛であり、兵士たちはもはや自分自身で装備する必要はなくなった。それどころか、日当さえ支給された。一八七〇

年の国民軍は、一八四八年に労働者のためにつくられた国営工場のようなものであった。それは、労働者にとっては生活の糧であった。いな、国民軍はそれ以上の存在であり、それはまさに、労働者たちの軍隊であり、労働者は国民軍に参加することによって、共和国の防衛に貢献したのである。最も過激な大隊が最も好戦的であったし、最も不満をのべたてた。彼らは、自分たちに最高の装備が支給されるように要求し、それを手にした。すべての大隊が過激だったわけではないが、首都の包囲が続いたため、国民軍兵士たちの気持も変化した。一〇月三一日、いくつかの大隊は政府を守ろうと強く望んでいたし、他の大隊もそれを邪魔しなかった。一月末までには、大隊のもつ雰囲気は変わっていった。すなわち、その時までには、装備もしっかりした、より下層の労働者から構成される大隊が生まれ、その大隊はより過激で、政府に対しても敵対心を燃やしていた。半飢餓状態、長く続いた空白、そして挙句の果てには、長く待たされ準備も不十分なままになされた突撃とその悲惨な失敗。こうしたことや、さらにガンベッタに召集された新しい軍隊がプロシア軍の相手にならなかったとの地方からの悪い知らせなどは、パリ市民や国民軍の大多数を激怒させた。

彼らは政府の無能ぶり、臆病、そして裏切りを責めた。一月二二日、国民軍は、政府の所在地である市庁舎に発砲した。しかし大隊は、政府軍の反撃にあってすぐに蹴散らされてしまった。国民軍は、政府に自分たちの要求を認めるように働きかけることを望んだ。しかし彼らは、パリを包囲しているプロシア人とともに、内乱を拡大するようなことは好まなかった。そして今や、休戦協定によってすべての正規軍はパリから出され、国民軍だけに実質的な軍事的支配権が与えられるようになっていた。より裕福な地区から徴集された大隊は、まだ政府とそれにとって変わった議会に忠実であった。しかし、労働者からなる大隊は数も多く、攻撃的で、彼らはフランスを裏切ろうとしている政府や議会に対しては何の忠誠心も感じなかったのである。

② パリの怒り

攻囲と休戦条約は、パリに、フランスの他の地域に対する激しい怒りを懐かせることになった。パリ市民たちは、自分たちは敗北していないと思っていた。彼らは四ヵ月以上プロシア人に抵抗してきたし、まだ抵抗を続ける気でいた。破れたのは地方の人々であった。第二帝政を支えてきたのも、教会とブルジョアジーに支配されていた地方の人々であった。彼らは愛国心をもたず反動的であった。彼らのために、パリ市民の尊い犠牲はすべて水泡に帰したのである。これが一八七一年の一月から二月頃にかけてのパリ市民の一般的な感情であった。彼らはいらだっており、疲弊し、怒りっぽく、反抗的になっていた。ただ自分たちの信念は貫こうとしていた。

多くの富裕な市民たちは、攻囲が始まる前に首都を脱出してしまった。他の人々も攻囲が終わるやいなや急拠移動した。富裕な人々のこうした逃避は貧しい人々を怒らせたが、それはまた彼らをより強靭にした。パリは今や、かつてないほど貧困階級の人々が治めるところとなった。そして彼らは、パリにふさわしい唯一の市民であるということを証明した。疲労、怒り、失望のため、パリ市民はいく分気が転倒していた。

パリ市民は平和は望まなかったし、そうかといって、戦争を継続するにはどうすればよいかということも、他の人たちより詳しく知っているわけではなかった。彼らは、自分たちだけで戦かうつもりはなかった。すなわち、彼らの要塞は今やプロシア人に占領されていたし、自分たちの意思をフランスに強要することはできないということも知っていた。彼らは自分たちを、フランスから切り離すこともできなかった。彼らとフランスを結びつけていた絆は断ち切れなかった。それでも彼らは、その絆があるということを自認しようとしなかった。彼らは、自分たちが何を望んでいるのか、わからなかった。しかし、つけ込まれないようには決意していた。彼らは傷心しており、おそらく重圧には耐えられなかった。

㈢ 国民議会選挙

国民議会の選挙がパリでは二月五日、各地方では二月八日にそれぞれ行われた。セーヌ県から選出された四三人の議員のうち、ピア、ドゥレクリューズ、マロン、ロッシュフォールを含む一〇人は、のちにコミューンのメンバーになった。また、他の三三人は、そのほとんどが共和派で、多くはジャコバン派であった。しかし地方では、大都市を除いて、王党派があらゆるところで勝利した。それはフランスが王政を望んだというのではなく、平和をもたらすには、それ以外に方法がなかったからである。ボナパルト派は信用を失い、共和派は好戦的であった。パリは戦争の継続を求めていたが、地方はすぐにでも平和が欲しかったのである。

① パリ市民の心情

新しい議会は、平和主義を主張することをはじめ、他の点でもパリを怒らせた。実際パリ市民は、新しい議会を承認したくなかったが、休戦協定がひとたび受諾されたからには、プロシアとの戦争の続行は不可能であるということは当然知っていた。もしパリ市民が他に何の不満ももっていなければ、もし彼らに対する扱いがもう少しうまくなされたならば、彼らはいやいやながらであろうと平和を受け入れたであろう。まして内乱になることもなかったであろう。長期の攻囲に耐えてきた気分の中で、パリ市民たちには、丁寧に取り扱われ、少々機嫌をとられ、そしていかなる事情があるにせよ、最終的にはいかなくてはならない所に静かに誘導される価値があったのである。

② 議会の態度

しかし議会は、パリ市民のこうした心情を理解していなかった。むしろ彼らを甘やかすことは脆弱になると考えていた。行われたことのいくつかは、避けられないものであったかも知れない。

プロシア人のパリ市内の凱旋行進は、四ヵ月の攻囲のあとの恥辱であると感じられたが、いずれ他のどこかで、もっと大きな利益をえるためにビスマルクに対して行った譲歩であった。

ティエールが行政長官に任命されたことは、パリ市民を怒らせたが、おそらくやむをえない措置であったことであろう。というのは、彼はヨーロッパで名声を博しているただ一人のフランスの政治家であったからである。彼はナポレオン三世の敵であり、穏健共和派とも王党派とも良好な関係にあった。ティエールは、ジャコバン派や革命家からは嫌われていた。彼は、一八三四年のリヨンの労働者の暴動を鎮圧した。そして、一八四八年、保守派の秩序党の党首となった。パリ市民は、いなむしろ、今やパリを支配することになった人々は、彼のことを考えただけでも腹がたった。彼の任命は、恐怖と疑惑を増大させた。だが、当時の状況下では、議会が行うことのできた唯一の任命であるといってよかった。

議会をボルドーからパリではなく、ベルサイユに移すとの議会の決定は、様々な理由からみて妥当なものとはいえ、パリ市民にとっては不快極まりなかった。過去に首都で、ジャコバン派や革命家がどれほどひんぱんに彼らの意思を主権議会におしつけてきたかを知っている代議員たちには、そのような暴徒たちの恐怖にさらされることなく、審議できる町に落ち着くことを選択する権利があった。

しかし、議会とティエールが行った他のいくつかのことは、必要性も正当性もなく、パリ市民にとっては、大変に不愉快なものであった。三月三日、パリ市民から嫌悪されていたオレル・ドゥ・パラディーヌ将軍が、パリの国民軍指揮官に任命された。ジャコバン派は、彼を反動とみなし、彼の任命は国民軍が解体に向かう序曲であるとした。この頃また、軍事法廷はフルーランスとブランキに対し、一〇月三一日の暴動に加担した廉で死刑の宣告をした。二人は、武力によって作られた政府を武力でもって転覆しようとしたのである。彼らに下された判決は、急進派には計画的な挑発、階級戦争の行為のように見えた。

議会はこれらよりも更に大きな他の誤りを犯した。三月一一日、議会は、「家賃と満期手形の支払い猶予措置」停止法を可決した。一八七〇年八月に、すべての金融上の支払い義務が、期日が来ても、それが延期されることに決まっ

たが、新しい法律は、この支払い義務のすべてを、短期日のうちに支払うように命じたのである。

しかも議会は、攻囲の間、支払われなかった家賃を集金することを定めた措置を発表した。商店主や職人たちは、自分たちの家主が安全性と食糧を求めて逃亡したあともパリに残っていたが、数ヵ月間殆んど仕事はなかった。そこに突然、自分たちの負債を数週間、ないし数ヵ月のうちに支払うようにとの命令が下ったのである。約一〇〇日間、殆んど食物らしい食物を食べていなかった労働者たちは、今や攻囲が始まるよりはるか以前にパリを去ってしまった家主に、家賃を支払うように要求されたのである。

「家賃と満期手形の支払い猶予措置」停止法と賃貸料の発表は、酷な仕打ちであり、愚かな失策であった。こうした措置を通して、パリ市民たちは、代議員たちは自分たちの敵であり、彼らはもっとも卑しい、また復讐心にあふれた動機から、そのようなことを行っているのだと確信するにいたった。事実、「家賃と満期手形の支払い猶予措置」停止法は、労働者というよりも下層中産階級に影響を与え、結果的に、下層中産階級はプロレタリアートの味方となった。このような味方をえることによって、プロレタリアートは、正味二ヵ月の間、議会に抵抗することが可能になったのである。

③　国民軍中央委員会

二月から三月末にかけて、パリ市民と議会の気分は高揚しつつあった。パリ市民のジャコバン派と革命家は、その時までに、国民軍に対する統制権を掌握した。二月上旬、国民軍連合が誕生した。これは、各区から選出された代表によって構成される中央委員会をもち、パリの全市民軍の名において行動した。インターナショナルのパリ各区の指導者たちの中にも、この中央委員会の代議員になるものが多かった。だがこれは、決して社会主義者にはならなかった。

委員会は、もともとは、二月五日の選挙の候補者を支持するために組織されたものであった。委員会はそれを、山

獄クラブ、インターナショナル、そして他のいくつかの団体と合意しながら進めた。連合と中央委員会は、二月五日の選挙のあとも存続した。というのは、国民軍の大隊からの代表者たちが、自分たちのつくった組織を好み、それは将来、自分たちの役に立つだろうと考えたからである。それがどの程度の権限をもつのかは決められていなかったし、だれにもわからなかった。しかし、三月二八日のコミューンの選挙までは、それはパリで、ティエールと国民議会に対する代表的な敵対的団体となったのである。

コミューンの選挙が行われたため、その団体の重要性は減少した。だが、全く無意味なものになったわけではなかった。それはまだ、軍事部門で力をもっていたし、それに服するものもいた。国民軍中央委員会は、決して実効力をもった機関ではなかった。だがそれにもかかわらず、それが現われたことには、決定的な意味があった。というのは、ある重要な期間、その委員会だけが、国民軍の約二〇〇大隊や、パリのあらゆる種類の社会主義者、革命家、急進派の声を代弁できたからである。

その政策は決してまとまったものではなかったし、権限も明確ではなかった。しかしそれは、反乱者の声を最も早いうちから表明していた。国民軍中央委員会の権力が増大するにつれて、パリがフランスに公然と反抗することを決めた、ということがだんだんと明らかになっていった。

第二節　パリの反抗

(一)　ティエールの施策

①　銃の押収

ティエールは、自分や国民議会の政策が、すでにいらだっているパリ市民を激怒させているということを知ってい

た。彼は、国民軍の武装を解除してしまうことが必要だと考えた。もちろん彼が、国民軍のライフル銃を取り上げてしまうことはできなかった。なぜならば、それには軒並み捜査しなければならないし、反乱軍の武装が解除される前に、かえって暴動が起こってしまうだろうからである。

彼は、もしパリ市民から銃を奪うことができれば、その方がうまく行くだろうと思った。問題の銃は、一般からの寄付によって代金が支払われていた。そのため市民たちは、銃は国家の財産ではなく、自分たち自身のものであると考えていた。プロシア軍が、パリ市内を行進することになった時、パリ市民たちは、銃が敵の手にわたらないようにするため、銃を労働者階級の地区の中に隠してしまった。ティエールの目的は、今や再びそれを取り戻すことにあった。

三月一七日から一八日の夜にかけて、彼は一万五千人の軍隊と三千人の警察官を、それら銃を押収し、できるだけ早くそれをパリから撤収してしまうために派遣した。その計画は成功するはずであった。銃はしっかりと管理されていなかった。そのため国民軍の兵士たちが寝ている間に、簡単にもち出せるはずであった。もちろんこの計画が、全く気づかれずに遂行されるということはなかった。しかし、もし軍隊の動きがもっと迅速であったならば、国民軍が効果的な抵抗を始める前に、銃をパリから運び出すことができたであろう。パリの国民軍は、その数において、ティエールの派遣した軍隊や警察官よりもはるかに多かったとはいえ、また、パリの国民軍がパリにおいては、乱入者と不利な条件であっても戦うことができたとはいえ、彼らはいつも、集合するのに時間がかかった。そのため軍隊は、だれかがバリケードを築く前に、狭い街路からでてしまうことを望んでいたのである。

② 銃押収の失敗

不幸にもティエールにとって、その冒険は思わぬ手違いにあってしまった。軍隊は銃を押収したが、しかし、目的を遂行するための、馬やロープ、馬具一式が足りないことに気がついた。軍隊が、戦利品の移動準備をしている間に、

太陽が昇り、国民軍に召集がかかってしまったのである。多くの市民や国民軍の兵士が政府軍を包囲し、政府軍の多くの兵士を脅したりすかしたりして上官の命令にしたがわないようにさせてしまった。そのため上司を見捨てなかった兵士はあまりにも少なく、殆んど抵抗することができなくなってしまった。ただ、すぐにパリから出ていくことは許可された。ティエールは、完全に挫折した。その計画は、もし失敗すれば、屈辱的な敗北になるものであったからである。

③　将軍射殺事件

三月一八日の朝、二人の将軍、ルコントとクレマン＝トマが捕虜となった。国民軍は、二人の身柄を守るためにある家に連行した。だが後に、暴徒がその家に侵入し、二人を有無をいわさず射殺してしまった。国民軍の現地の指揮官にも、中央委員会にも、その殺害には責任はなかった。それはたまたま、合流した暴徒によって行われたものであり、誰かがたくらんだものなのであろうが、誰かはわからなかった。ただこうした事情も、当時は全く知られていなかった。

ティエールと議会がこの事件を知った時、これは国民軍の入念な計画によるものであり、フランスの正統な政府に対する挑戦である、と信じて疑わなかった。銃押収の失敗、二人の将軍の暗殺は、人々の心を固くし、精神を閉ざしてしまった。すでに内乱の話がささやかれていた。だが人々は、それはたんにいつか起こるものでしかない位の感じでいた。人々は、内乱は回避できるものと望んでいたし、それだけの十分な根拠もあった。結局、パリ市民たちは何をえるためにその頑固さを貫き、また、ティエールと議会は何を求めてその残酷さを保ったのであろうか。

(二)　三月一八日の蜂起

三月一八日以前から、人々の神経はすりへり、感情は悪化していた。しかし、その日までは、両者とも暴力によっ

てえられるものは何もない、ということを領解していたように思えるし、それは可能なように見えた。しかし、善意の人々はまだ和解を試みようとはしていたが、今や理性による解決には望みがもてなくなってきた。両者とも、三月一八日以前には、実際望みもしなかった戦闘の準備に入ることになった。そして、パリ市民たちは、戦闘が続いている間、その最中にもまた他のいかなる時にも、彼らは何のために戦っているのか、正確なところは何もわからなかったのである。

① ティエールの作戦

彼の銃押収作戦が失敗したあと、ティエールは首都から撤兵することにした。彼には自分の自由になる軍隊はわずかしかなかった。そのため、三月一八日の朝の事件でわかったように、彼はその軍隊に頼ることはできなかった。彼は、信頼できる軍隊が召集できるまでは待つことが得策であると判断した。しかし、彼はビスマルクの許可なく動くことはできなかった。

そこでティエールは、彼が一八三四年にリヨンでとった行動を繰り返した。彼は暴徒に数日間の猶予を与え、その後に彼らの撲滅に乗り出したのである。ある人々は、ティエールは暴動を挑発しておいて、後でそれを弾圧するという口実をえたかったのだと言った。彼らは、それこそが一八三四年にティエールが行った方法だと言う。ティエールは、三七年後に再びそれを繰り返したというわけである。

しかし、この二つの事例は、事情が全く違っている。一八三四年、リヨンの暴徒たちは弱体であったし、ただ軍隊が撤退した時だけ、彼らは勢いを増しただけであった。一八七一年には、パリ市民たちは、ティエールが銃を押収しようとする以前から、ティエールよりもはるかに強力であった。ティエールには、時間を稼ぐ以外に方法がなかったのである。そうすれば、彼は機転を働かせ、懐柔策をとれたかもしれなかったからである。事実彼は、悪賢しこく、復讐心が強かった。しかも、三月一八日以降、彼には確かに流血を防ごうという気持はなくなっていた。

パリ市民たちは、フランスの合法的な政府に公然と反抗した。彼らは祖国の敗北を利用し、非合理な要求をした。しばらくの間、彼らの力が強かったため、処罰することができなかった。ティエールの政策は、自分の方が弱体な間は、パリ市民たちに重要な譲歩をするように迫られないこととし、自分が強力になったら、彼らを徹底的に罰するというところにあった。彼は、貧困や苦難に対する同情心はもっていなかった。度量は狭く厚かましく、独善的なところがあった。しかし彼もまた、愛国心の強いフランス人で、フランスきっての有能な政治家であった。

② 国民軍中央委員会のパリ支配

三月一八日以後、国民軍の中央委員会は、パリ市の市議会が選挙で成立するまで、パリの法と秩序を維持するための全責任を負うことに決めた。パリ市長ジュール・フェリーをはじめ、市当局者の多くはパリを去った。ただ各区の区長たちはあとに残った。しかし彼らには、政治的な実権はなく、中央委員会が責任をとることになった。というのは、彼らだけが権力をもっていたからである。ただ彼らには、選挙で市議会が成立するまで秩序を維持するという以外には何の政策もなかった。彼らは、ティエールの銃押収に抵抗するための組織すらつくれなかった。実際、彼らは銃押収については、その件が終るまでは何も知らなかった。

中央委員会は革命的な団体ではなく、いく分よろめきながら反乱状態に陥ったある市を、さいわい自分たちにはとくに落ち度がなかったため、いつの間にか統制している人々の集まりであった。[2] しかし、中央委員会はいやおうなしに動かされている人々のような行動はしなかった。彼らは、暴徒に全面的に同情した。彼らは主導権はとらず、たとえ他の人たちがそれを握っても別段気にしなかった。彼らは、三月一八日、ティエールを苦しめた反抗運動には関係しなかったが、すぐそれを支持した。

中央委員会は、事件が起こるたびに自分たちが押し出されていく方向に動いていくことに満足した。三月二四日、中央委員会は「家賃と満期手形の支払い猶予措置」停止法を廃止した。彼らは、パリにあるロスチャイルド家の利益

を守るという約束で、同家から五〇万フランを借りた。そして、同じくフランス銀行からも一〇〇万フランを借用した。このような手を打って、中央委員会は国民軍に支払う資金を調達した。その結果、国民軍の忠誠をえることができるようになったのである。

③ 国民軍中央委員会との交渉

三月一八日の後、数日間、ティエールと中央委員会の間で交渉が続けられた。交渉は、パリの区長の何人かと、国民議会の中でパリ市を代表する代議員たちの尽力によってねばり強く行われた。これらの交渉者の中で、おそらく最も重要な人物は、ジョルジュ・クレマンソーであろう。ヴェルサイユよりも国民軍に対してより敵対的であった区長の多くは、自分たちの区内の中央委員会に対する抵抗を急拠組織した。政治的にはより急進的で、気持のうえではそれぞればらばらであった他の区長たちは、調停のために一生懸命努力した。フェリーと当局者の多くがパリを撤退した後、ティエール内閣の内務大臣ピカールは、各区長に、諸君はパリの臨時政府をあずけられているということを告げる通達を出した。もちろん実権は、国民軍の中央委員会の手にあった。だが、区長たちの法的正統性は、交渉者としての彼らの立場を強化した。区長たちは、中央委員会に代表団を派遣することに決めたのである。

代表団と中央委員会との会見の席上、クレマンソーは中央委員会に、国民議会の正統性を承認するように促がした。クレマンソーは、「中央委員会はパリ市庁舎を出て、それを各区長とパリの代議員に明け渡すべきである。彼らこそパリ市民のことに心を砕いており、国民議会に自分たちと公正に付きあうよう説得するため全力を尽そうと決意している」と言った。

中央委員会を代弁してヴァルランがクレマンソーに言った。それは、もしヴェルサイユの国民議会と政府が、市会の直接選挙を認め、彼が〝市政の自治〟と呼んでいるものを承認し、また、パリ警視庁を廃止し、国民軍の将校と隊長を選挙する権利を認め、満期手形の無条件支払い延期、支払い期限に対する公正な法律の制定、そしてヴィノアの

軍隊をパリから約一〇〇キロ移動するように彼に命令する、以上のことをしてもらえば、自分たちは満足である、というものであった。

つぎに今度は、中央委員会が代表者を送り、第二区の区庁舎で、各区長や代議員たちと会うように勧められた。この会合には、もっと保守的な区長や代議員らが出席した。彼らはおそらくティエールの信頼をえており、たしかに中央委員会の代表団と仲直りすることを最も嫌っていた。彼らの敵意は、妥協を阻止することはなかった。すなわち、パリの代議員は、国民議会に早速、すべての国民軍の将校の選挙を取り決め、パリに強力かつ民主的な市当局を樹立する法案を提出することを約束したのである。そのかわり、中央委員会の代表団は、中央委員会はパリ市庁舎を明け渡すと約束した。

④　交渉の決裂

中央委員会は、当初自分たちの約束を守るつもりであり、パリの街角にも自分たちの意向を訴えるポスターを貼り出した。しかし翌三月二一日、その気持を変えざるをえなくなった。二〇各区の監視委員会の会合が開かれていた。そして中央委員会は、その弱腰を厳しく批判されたのである。

しばらくして代議員は、パリに強力な市政府を樹立するとした法案を提出した。そして彼らは、国民議会にその法案を早く可決するように説得した。それでも彼らは、議会がその法案を可決するとは確信できなかった。反乱者を激しく批判するジュール・ファーブルの演説は、熱狂的に受け入れられた。国民議会が反乱者に対して、はっきり敬意を示したこの明確な証拠にもかかわらず、区長や代議員たちは、パリ市民に対して出した彼らの宣言文の一つの中で、提案された法案は、国民議会で万場一致で承認されるであろうという言い方をした。

区長や代議員たちはまた、パリ市民に対して、中央委員会によって三月二二日と決められた非合法的なコミューン選挙には投票しないようにと訴えた。保守色の濃い区長たちは、反乱者に対して行わなければならない抵抗の準備を

続けた。そして、保守的であろうと急進的であろうと、すべての区長たちは、中央委員会に自分たちの選挙人名簿を手渡すのを拒否した。そのため中央委員会は、やむなく三月二六日までコミューンの選挙を延期せざるをえなくなったのである。

⑤ 見せかけの妥協案

三月二二日、中央委員会に反対するデモが、まだ保守的な区長が支配する地区で組織された。デモはブルスから出発しラ・ペー街で終わった。だが、その結末はあまりにも激しい流血の惨事をもって閉じることになった。二日後の三月二四日、中央委員会は、第一区と第二区の区庁舎を占有した。その日は、彼らがクレマンソーを、一八区にある彼の事務所から追放した前日であった。中央委員会は、今やパリの完全な主人になった。区長や代議員の立場は、今や今まで以上に困難なものとなった。反乱者は、もはや今までのように説得しても通じなくなった。

一方、国民議会やティエールらも、見かけは譲歩するようなそぶりを見せていたが、パリ市民を満足させるようなことは何もしなかった。三月二三日、区長の一人が、ティエールからの書状をもってパリへ来た。その書状には、区長たちが秩序を回復するために提案してくるいかなる特赦であろうとも政府としては、うけ入れるとの約束が記されていた。

もうひとつの書状の中では、ピカールが市政府を樹立する法案をすぐにでも可決し、それに基づいて、四月三日には選挙を行うと約束していた。しかし、同じく三月二三日には、国民議会は、アルノー・ドゥ・ラリエージュによって提出された動議を緊急用件として扱うことを否決した。その動議とは、「国民議会は将来、パリ市当局との近密な関係を維持し、各区長たちが状況に応じてとるいかなる対応をも許可する」というものであった。また、「国民軍の選挙は三月二八日以前に、パリ市議会の選挙は四月三日以前に行なわれる」というようにもなっていた。

ティエールが国民議会にもう少し妥協するようにと説得につとめた証拠はない。それでも、ティエールやピカール

が各区長たちに送ったメッセージには、たしかに反乱者たちに譲歩しても暴動を鎮静化させようとの意図が見られる。彼らはまた、各区長やパリの代議員たちにも事態を静めるように勧めていた。各区長や代議員の多くは、善意の人たちであり、両当事者が争えばフランスを弱めてしまうだけであり、そうした状態を何とか好転させたいと念願していた。

しかしティエールは、パリ市民と和解することを好まなかった。彼らは反乱者であり鎮圧されなくてはならなかったのである。何人かの区長は彼と同意見であり、時間を稼ぐために、交渉したのかも知れない。他の区長たちは、たしかにティエールにだまされた。すなわち、三月二六日のパリ市の選挙まで、彼らは、ティエールが本当に自分たちが平和的な解決に到達するように望んでいる、と信じていた。

三月二五日、ヴェルサイユからパリへもどってきたクレマンソーは、区長たちに国民議会は和解に反対である旨、伝えた。この知らせは、各区長たちを動揺させた。しかし、彼らはまだ、ティエールが何か合理的な妥協策を支持し、国民議会にそれを受け入れるように説き伏せてくれるのではないかと信じていた。彼らは、三月二六日以降まで、パリ市会の選挙を延期するように、中央委員会を一生懸命説得した。

区長たちが、中央委員会が、区長たちが好もうと好むまいと、その日に選挙を実施するのを決定したということを知った時、彼らはついに屈服し、選挙を行うことに同意した。

この〝区長たちの降伏〟は、のちにヴェルサイユによって拒否された。しかし、パリの市民たちは、選挙はティエールによって認められたものと思っていた。ゆえに、選挙は合法的なものと信じたのである。これこそが、パリ市民が保守的な地区においてさえ、投票した理由だった。しかし、選挙後一両日たって、市民たちは、区長たちの行動は、ティエールによって否認されたものだったということを知った。そのため、保守的な地区の代表者たちは、市議会の議席には着席しなかった。約半分の有権者が三月二六日に投票した。非常に多くの市民が、パリが攻囲される前に、

また、休戦協定や三月一八日の後に、パリから逃げてしまったということを考えると、半分の人が投票したということは、大きな比率である。

(三) コミューンの成立

パリ市議会、すなわち一八七一年のコミューン議会の最初の会合は、三月二八日、市庁舎で開かれた。それは、本来、九一人の議員から構成される予定であった。だが、六人がそれぞれ二議席分だぶって選出されており、また、保守的な地区を代表する穏健派は出席しなかったので、この最初の議会に出席した議員は約七〇名強であった。四月一六日、二一の空席を埋めるための補欠選挙が行われた。この選挙であえて投票に行った選挙人の割合は非常に少なかった。これは、二週間の間に、コミューンが急激に人気を失ったことの証拠であると指摘されてきた。しかし、補欠選挙は、大部分が、富裕な地区で行われ、そこの住民は今やコミューンは非合法的である、と考えていた。[3] コミューンが、年を経るたびに、少しずつ人気を失っていったということは、信じられる。しかし、最初にコミューンのために身を投じた階級の支持を失ったということは、事実に裏付けられた結論とはいえない。

① コミューンの政策

コミューン議会は、市庁舎で開会されるとすぐに、徴兵を廃止した。国民軍以外の武装軍が、パリに入城するのを禁止したのである。すべての身体健康な成年男子は、国民軍の兵士であると発表された。また、家賃と負債の支払いが延期された。さらに、教会と国家の分離も布告された。これらの法令は、コミューンのすべての構成員に共通する政策であることが示された。これらの政策に、とくに社会主義的なものはなかった。

コミューンの兵士たちが望んだのは、パリの自治とパリ市民の経済的な保障であった。家賃と負債の支払い義務は、拒否されなかった。所有権の主張は、原則として拒絶されなかった。行なわれたことは、ある理論のためとか、金持

を傷つけたりすることではなく、貧しい人たちをすぐに、また、一時的に救済することであった。

② コミューンの組織

コミューンは、一〇の執行委員会を設けた。そのうちのひとつ「行政委員会」は、他の九つの委員会よりも上位にあると考えられた。九つの委員会は、軍事、保安、司法、財政、食糧供給、労働・工業、公共事業、外務、教育をそれぞれ担当した。コミューンは近代国家の機能を果たしたといえる。

ただ、これら委員会の機能は、決して明確に区分けされていたとは言えず、かなり重複している部分もあった。コミューンの行政は混乱することが多かった。だれがどこに責任をもっているのか不明な点があった。

軍事行動でさえ、ひとつの中心軸で展開されているとは言えなかった。コミューンの軍事委員会の正統性は、国民軍中央委員会によって承認されていなかった。中央委員会は、コミューンの選挙を推進することを望んでいた。そうすればパリの全般的な政治に対する責任は、選挙された議会の義務となるからである。しかし、中央委員会は、ただ政治責任の放棄を望んでいたにすぎない。すなわち、三月二八日以後でさえ、彼らは、自分たち以上に軍事行動を指揮する権利をもっているものはだれもいないと信じ続けていた。彼らは、コミューンの軍事委員会の権威は否定しなかった。ただ無視した。コミューンによって任命された軍事指揮官たちは、あまり幸運ではなかった。彼らは、中央委員会にも、軍事委員会にも気を使わなくてはならないということに気がついたのである。

③ コミューンの生活

もし反乱者たちが、三月二八日以前は国民軍中央委員会によって、あるいは、その後はコミューンによって正当に指導されていたならば、彼らは、実際よりもはるかに強力な存在になっていたであろう。彼らは多くの利点をもっていた。

何週間かは、彼らの武装した軍隊の方が、ティエールやヴェルサイユの国民議会のもっている軍隊よりもずっと強

力であった。資金不足に悩まされることもなかった。フランス銀行はパリにあったので、彼らはそこから約一五〇〇フランを借ることができた。彼らの全支出は四千万フランを越えることはなかったので、破産に脅やかされることはなかった。そのため、彼らは多くの合法的なフランス政府のいうことをきかないですむというひとつの利点をもっていた。

食糧不足に苦しむこともなかった。休戦条約後、パリにはすぐに豊富な供給がなされた。その上、パリの大部分をまだ包囲していたプロシア軍は、自分たちの補給線を通して、反乱者たちに食糧が届くことを望んでいた。そうすることには利益があった。フランスが内戦によって分裂することは、ドイツにとっては都合がよかったからである。もちろん農民は、いつも自分たちの農産物が良い値で売れさえすればそれで満足した。パリ市民は、包囲されている時よりも、一八七一年三、四、五月の方が食糧事情はよかった。賃金も今まで通り規則正しく支払われた。完全雇用と十分な賃金。パリの労働者たちは、一八七一年の数ヵ月間、この二つをえていたのである。

反乱者たちは、とくに三月二二日の示威運動の失敗以後、パリに残り不満をもっているブルジョアジーたちを恐れる必要は殆んどなかった。パリを去らなかったブルジョアは、その大部分がヴェルサイユをただ何となく支持しているだけであった。彼らもまた労働者たちと同じように篭城していた。また同じく、自分たちよりもはるかに裕福な人々が、プロシア人がパリを包囲するよりはるか以前に、パリを去るのを見ていた。

彼らは、コミューンの兵士の頑固さを遺憾に思ったかも知れない。彼らは、自分たちの試みは成功しないかも知れないと思った。ヴェルサイユへの服従は、彼らには正しいというだけではなく、長期的に見て、それしか取りようのない唯一の方法のように思えた。そうとはいえ、彼らは、彼らの多くは、少なくとも激戦と最悪の残虐行為がはじまる前の暴動の初めの頃の数週間は、コミューンの兵士への同情を禁じえなかった。ヴェルサイユを熱心に支持していた人は、大部分が何はともあれパリを去った。あとに残った〝法と秩序〟の友には、指導者もいなければ、主導権を

とる力もなかった。彼らは静かにしていることが賢明であると考えたのである。

当時、反乱者には現実の利益があった。それでも彼らはそこから利益をえることには失敗した。彼らはヴェルサイユに行進し、国民議会と政府をもっと地方に追いやったかもしれないし、あるいは、それらを乗っとってしまったかも知れない。彼らは、プロシア軍の手に落ちていない首都の外にある要塞や戦略的地点を占領できたかもしれなかった。彼らが合法的な政府に公然と反対したからには、大胆にいどむことは賢明なことであった。いずれにしても長期的には、反乱者には勝ち目がなかった。

彼らは、フランスを征服できなかった。また、いくつかの大都市を除いては、他の人々が彼らを見本にするようには見えなかった。彼らが成功できる唯一の方法は、自分たちの力をできるだけ強め、しかも自分たちの要求を和らげることであった。そうしてもわずかな見込みしかなかったが。もし彼らが、恐るべき強さとともに穏健な点ももっているように見えたならば、ヴェルサイユ側は、フランスを長い内乱状態に陥れるよりも、彼らに本当の譲歩をした方が良いと考えたかもしれない。あるいは、もしティエールと国民議会が捕虜にされたならば、コミューンの兵士たちは、フランスの他の地域に、地方がよろこんで受諾するような条件を提示したかもしれない。それはコミューンに対する明確な政策であった。すなわち、軍事的には大胆に、政治的には穏健にである。[4] それは成功しなかったかも知れないが、他にはとるべき道はなかったのである。

④　コミューンと国民軍中央委員会

反乱者には、賢明なものかどうかにかかわらず、政策というものがなかった。もちろん彼らは要求はした。しかし、要求を実現するために何をすればよいのかわからなかったし、その要求に譲歩すれば、それが敵の得にもなるために、何をすべきかもわからなかった。

三月一八日から三月二八日にかけて、反乱の主導権はすべて国民軍中央委員会の手にあった。彼らの第一の希望は、

事件によって彼らに重くのしかかってきた責任を取り除きたいということであった。正確に言うと、彼らは責任は恐れていなかった。彼らは、自分たちが統制権を握っている間は、勃発した事件に対する一切の責めを負った。そして彼らは、他に責任を取る人がいない時は、自分たちが責任を取るのが義務であると思った。

しかし、彼らは自分たちは人民の信条を守っている者であるとみなしていた。主導権を取るのは自分たちではなかった。すなわち、彼らの仕事は、パリ市民が市議会を選出するまでであり、その間、できるだけ早く、そのような選挙された議会を成立させることであった。彼らは、この仕事に対して精力を注いだ。

国民軍中央委員会が、ティエールを信用していなかったことは事実であるが、しかし、彼らは、ティエールと交渉することが時間の無駄であるとか、また、パリ市民に対する自分たちの最初の義務は、自分たちが長く享受することはできなかった軍事的優位を利用することである、とかいうようなことは考えてもみなかった。だから、三月一八日から三月二八日までの貴重な一〇日間が、無駄になったのである。

⑤　コミューン支配と国民軍の行動

コミューンが、支配するようになった時、国民軍が以前ほど効果的に使用されるということはなくなった。中央委員会は、まだ大隊から服従をえようと努力していた。コミューンによって任命された軍事委員会は、軍事行動を指揮するものと思われていた。だが、軍事委員会が命令を送った指揮官たちは、同時に、中央委員会からの要求をも考慮しなければならなかった。

国民軍たる市民軍は、もし彼らが熱心に説得されなかったならば、自分たちの地区から離れなかったであろう。すなわち、彼らは、自分たちの本拠地の防衛は、ほんの二、三通り先であると考えたのである。彼らをパリのある地区から他の地区に移動をさせるのは、容易ではなかった。彼らを首都の外から出し、もっと広々とした田舎に移すということは、最も難しかった。

⑥　軍事訓練なしの革命軍

国民軍の何大隊かは、包囲の後、パリを去った。しかしまだ、二〇万人以上が残っていた。もっとも、コミューンは、その権力の絶頂期においても、六万以上の機動部隊をもつことはなかった。国民軍には訓練らしいものは殆んどなかった。理論的には、普仏戦争で敗けたのは、正規の、高度な訓練を受けた軍隊であった、ということになる。そのため訓練や規律には人気がなかったのである。

革命軍は規律なしか、もしくは、わからないほどの規律でやっていくことができなくてはならなかった。パリ市民は、最初の共和国の勝利した軍隊は訓練を受けていなかったし、訓練がなかったからといって、プロシア軍を打ち負かす妨げにはならなかった、と信じていた。ただ、パリ市民たちは、当時の軍隊の数が敵のそれよりもはるかに多かったということ、また、その軍隊は、最後は他の軍隊のものとは同じではないが、効果においては勝っている自分たち自身の規律を発展させていた、ということに気づいていなかった。

最初の共和国の軍隊もまた、どこにでも進軍していきたがった。しかし、国民軍において、訓練のかわりをしたものと思われた革命的熱気だけでは、警備兵を自分たちの母国から数マイル以上移動させることはできなかった。この訓練をしなくてもよいという信仰は、最初の革命の遺産の中でも、恐らく最も不合理なものである。ないしは、むしろそれは、最初の革命について発明され、しかもいまだに歴史家によって解明されていない神話であったのである。

(四)　敗北への道

①　四月二日の戦闘

コミューンの兵士たちは、革命家ならば決してすべきではないことを行ってしまった。すなわち、彼らは攻撃されるのを待ったのである。彼らは、まるで自分たちの敵を激しく攻撃しないことが美徳であるかのように、むしろ攻撃

されるのを待つことを誇った。クールブヴォアがヴェルサイユ軍によって奪取されたことによって四月二日に戦闘が始まった時、コミューンが最も望んだことは、最初に攻撃してきたのは、自分たちではなく、敵であるということをはっきりさせることであった。

② ジャコバン派とブランキ派への評価

ジャコバン派とブランキ主義者が優位を占めていた議会が、戦争をしたくないと誇らしげにいうのを見ることは、奇妙な感じがする。ジャコバン派は、この三〇年のうちに、彼らが最も尊敬していたことをつねに真似しなかった、ということをしばしば示した。彼らは、口は悪かったが、ロベスピエールのようにピリピリしていなかった。彼らは、ジャーナリストであり熱狂者であった。

しかし、ブランキ主義者は、もっと激しい革命家であるように思われていた。彼らは過去に、暴力は控えた方が賢明であるとされた時でさえも、暴力をやめることは殆んどなかった。彼らは、コミューンにおいて、これまで以上に自分たちが欲していたものに近づいた。それでもなお、彼らは自分たちに巡ってきた好機をつかむこと、ないしは、他人につかむように仕向けることに失敗した。

何人かの人は、コミューンが破滅したのはブランキがいなかったからだと言った。私としては、彼もまた、他の方法であるとはいえ、コミューンを破滅させたであろうと思う。彼は、攻撃的で大胆であり、他の人を巻き込んでいったかもしれない。しかし、彼は恐らく何が可能で何が不可能かということを正しく理解していなかったであろう。実際彼の評判は極めて悪かった。その上、彼が手がけた暴動はことごとく失敗に終わっていた。

彼は、一八二七年に革命家としての人生を始めた。それ以来、三つの革命があったが、それはすべて彼がいない時に起こった。これは彼に不利な、決定的証拠ではない。多くの成功した革命は、主な革命家たちがいない間に起こっているものだからである。レーニンでさえ、密閉された馬車でロシアへ送り帰された時には、すでにツァーの専制政

治は倒されていた。

人間行動のこの分野においては、指導者の通常の仕事というのは、革命を始めることではなく、それが起こった後、その主導権をとるというところにある。ロベスピエールやレーニンにならって、ブランキが革命を数ヵ月の間ですら、支配できたのかどうか疑がわしくさせているのは、一八四八年三、四、五月のブランキの行動である。彼は、一八四八年の初期の頃、フランスで何が起ころうとしているのかを全く理解していなかった。しかも、一八七一年には、おそらく彼は状況の本質を見ぬいていなかったであろうし、あまり情報ももっていなかったであろう。彼はコミューンを大胆にさせたかも知れないが、その行く手を明確に示すことはしなかったであろう。

③　コミューンの反撃

コミューンの兵士たちは、ヴェルサイユ軍がクールブヴォアを占拠したということを聞いた時、ついに唯一の軍事指揮権を決定した。彼らは、アメリカ南北戦争の退役兵で有能な指揮官クリュズレを陸軍省代表に選んだ。彼は四月四日に指揮権を引き継いだ。ゆえに、四月三、四日のコミューン兵士による反撃が壊滅的な失敗に終わったことに対する責任はなかった。

クリュズレには、自分がやりたいと思うことを実行することが許されなかった。結局、彼は、自分にとってよいと思われた方法で、訓練を課すことが許されなかったのである。彼は職業軍人であった。彼は自分の軍隊の面倒はみた。しかし、彼自身、軍から親われるにはどうすればよいかわからなかった。彼は、部下に諂うことによって、彼らの服従をえるというようなことには慣れていなかった。この点に関しては、彼は人気のある指揮官ウード、ベルジェレそしてデュヴァルより劣っていた。彼らは、クリュズレが指揮官になる直前にパリ市民を大惨事へと導いてしまった。

クリュズレが訓練を課そうとすると、必ず彼は独裁制を目指しているのではないかと疑われた。コミューンの兵士たちは、自分たちが彼を指揮官においているのだと思っていた。しかし、その地位はあまりにも低かったので、彼は

コミューンの兵士たちに充分に貢献できなかった。彼は、四月二八日、もう一人の有能な将校ロッセルと交代させられた。

ロッセルも五月九日に、彼の上官の無能さに激怒し辞職してしまった。彼の任期は短かったが、その間に、勇敢で有能な部下、ドンブロフスキー、ウロブレフスキー、ラ・セシリアを任命した。彼らは、クリュズレやロッセルよりも革命的な状況で指揮をとる気質に適していたのである。

④　公安委員会の設立

コミューンの兵士たちが、時流は自分たちとは反対の方向に向かっているということに気がついた時、公安委員会をつくる以外に得策はないのではないか、と思った。インターナショナルに加盟していたコミューンの兵士たちはそれに反対したが、多くはジャコバン派であったそれ以外の人々たちが勝利をえた。

公安委員会は、五月一日、開かれた。そして、ヴェルサイユ軍がイシーの要塞を占拠したあと、五月九日に再建された。公安委員会は何もやらず、行ったことと言えばコミューンを分裂させただけであった。五月九日に公安委員会が再建された時、そのメンバーはすべて設立当初から賛成していた多数派に所属する人々であった。

インターナショナルは、もはや公安委員会を代表するメンバーではなかった。[5] 原則的に公安委員会の存在に反対であった少数派は、ついにコミューンから脱退すると脅した。彼らは、脱退しないようにと説得された。しかし公安委員会の存在は、依然として、彼らを多数派から分離させていたのである。

少数派はロベスピエールを崇拝していなかった。彼らは、公安委員会はパリの労働者が打ちたてた民主主義を破壊するだろうと思っていた。彼らは独裁制を恐れていた。彼らが手にしたものは、まさにもうひとつの委員会であり、それは、すでに存在している一〇の他の委員会のように、自由にとってよりも秩序にとってより危険なものであった。もし公安委員会の中で、他の人よりも極立っている人物がいたとするならば、それは、ドゥレクリューズであった。

しかし、彼はジャーナリストであり雄弁家であるという存在にしか過ぎず、それ以上の人物ではなかったのである。

(五) ヴェルサイユ軍のパリ侵入

① 大虐殺

コミューンの兵士たちは、ヴェルサイユ軍がはじめてパリに侵入した五月二一日以前には、戦闘らしい戦いはしなかった。五月二一日までは、彼らは、自分たちにとってなじみのある状況で、親しみのある通りで、また、バリケードの背後で、再び戦うことができた。その時まではまた、軍事組織はほとんど重要性をもたなくなっていた。

パリのどの地域も、他の地域から離れていないし、高層住宅は、素晴らしいついたてになっている。反乱者たちは、ひとつのバリケードから他のバリケードに、素早く、気づかれずに移動できた。これらの条件のもとで、彼らに対抗する大勢力がたちはだかったにもかかわらず、彼らは一週間、激しい抵抗を展開できたのである。

ヴェルサイユ軍は、とくにその将校たちは、残虐な行為をした。武装しているように見えた人は、男だろうと女だろうと即座に射殺された。僧侶とか、他の社会的立場のある人からコミューンの兵士であると非難された人は、裁判なしに死刑になった。最後の流血の週の間に、約二万人がパリの路上で殺された。貧しい人たちに脅やかされていた裕福で、社会的な地位の高い人たちの復讐ほど険悪なものはなかった。

コミューンの兵士たちもまた残忍だった。だが政府軍ほどではなかった。四月初旬、戦場での最初の戦闘のあと、ヴェルサイユ軍は捕虜を射殺するという習慣を採用した。彼らは、パリ市民の方がその先例を示したのだ、と言った。パリ市民たちはルコント将軍やクレマン＝トマ将軍を殺さなかったであろうか。

ヴェルサイユ軍はおそらく、パリの当局にいた人はだれ一人として、それら将軍の暗殺を命令したり、もしくは、それに同意したりしなかった、ということを知らなかったのであろう。ヴェルサイユ軍はその上、捕虜は反乱者であ

るから、殺しても正当である、と考えていた。その最初の犠牲になったのが、デュヴァルであった。彼は、最初の暴徒による反撃の時、囚人になったコミューンの将校であった。

コミューンの兵士たちは、捕虜をとらえなかった。彼らの返答は、パリで人質を捕えることであり、もしヴェルサイユ軍が彼らの捕えた捕虜の殺戮をやめないならば、コミューン側も自分たちの人質を殺すという、四月四日の警告を出すことであった。

ヴェルサイユ側は、この脅しに乗ることを拒否した。というのは、もしコミューンの兵士たちが人質を射殺すれば、彼らはヴェルサイユに対する以上に自分たち自身を傷つけてしまうことになるのは間違いないし、彼らは匪賊であり殺人鬼であるというティエールの主張を裏付けてしまうことになるからである。

コミューンの兵士たちも同じことを考えていたようである。ヴェルサイユ側は、かつてないほど多数の囚人を殺害したが、人質については、五月の最後の週まで殺されなかった。そして、コミューンの兵士たちは、一人の大司教を含む一〇〇名ほどの人を射殺した。それが、勝ち誇るヴェルサイユ側によって処刑されたコミューンを支持してくれた何千という人に対する見返りとして、コミューンの兵士たちができるすべてのことであった。大司教を殺したことは、パリ市民を大虐殺したこと以上の憤慨を招いた。

これは当時、世界中で受け入れられたコミューンについてのティエールの説明であった。社会の上層部の人々は、いたる所で、フランスの諸革命の中でも最も恐ろしいものが、ついに抹殺されたことを喜こんだ。ただ彼らは、ずっと後になって、その革命について最も恐ろしいことは、その革命の抹殺のされ方であった、ということを学んだのである。

② コミューン後の諸党派

コミューンは、六月暴動が一九世紀の中頃に行ったことを、一八七〇年代に共和主義のために行った。それは、社

会主義者と革命家の評判を落とした。かといって、それは保守派を強化したわけではなかった。保守派が優位になったのは、コミューンのお蔭ではなく、その平和主義による。

共和主義は、赤いパリの敗北によって傷つくことはなかった。今や農民が投票しようとするボナパルトはいなかった。穏健共和派は、すでに社会主義者や革命家の同盟者ではなかった。すなわち、彼らは、彼らの先輩たちが国営工場やリュクサンブール委員会の設立を助けたようには、コミューンの設立を援助しなかったのである。

フランス国民は、一八四八年の時よりも一八七一年の時の方が、共和派についてはよく知っていた。彼らは今や、彼らの多くが、二三年前にはあまりにも無知であったため、できなかった区別をすることができるようになった。

最も重要なことは、行政長官は絶対的な権力を求める王位要求者ではなかった、ということである。すなわち、彼は、自分の好みである王制を払拭した一人の老政治家であり、今や、共和国が、フランス人を最も分裂させないであろう、という信条を懐いていた。

王党派は、まだ団結できないでいた。もし王党派が敏速に行動していたならば、彼らはフランスに国王をすえることができたであろう。しかし、王党派の各王家へのこだわりと、王位を要求する行動とが、敏速な行動を妨げた。たとえ彼らが、フランスを王制にしたとしても彼らは同時に、フランスを民主制にしなければならなかったであろう。

フランス人は、一八四八年以来、男子普通選挙制をしいている。そしてその後、フランス人は、ルイ・ナポレオンの、最初は残酷さ、次に脆弱さ、そして最後は醜態によって、個人的な統治を嫌うようになっていた。王党派は、自分たちは議会で多数派なので強力である、と思っていた。彼らは、一八七一年二月に、なぜ自分たちが選ばれたのかを知らなかったし、また、それを忘れることを選んだ。

穏健共和派は、議会では少数派であったが、王党派よりも人々の気持をよく理解していた。ティエール、フェリーそしてガンベッタは、それぞれ独自の方法で、どの王党派よりももっと大きな、もっと意思の固いフランス人の団体

に訴えかけた。穏健共和派は、ささいな問題では分裂していたが、共和国の防衛という点では団結した。彼らの戦争継続の願望でさえ、今や、彼らに不利になるというよりも、むしろ有利に働いた。戦争は無事に終わった。しかも、フランスの多くの身分の高い市民たちが、たとえ敗北したとはいえ、戦闘意欲に燃えていたということが、フランスにとっての誉れであると考えられた。ガンベッタもまた、その必然的な事態を受け入れねばならなかったので、彼のことを誇ることは可能だったのである。

コミューンが失敗したからといって、それによって共和国が傷つくことはなかった。しかし、コミューンの失敗は共和派をより保守的にした。それは、状況が違えば、共和派がなっていたであろうものよりも、もっと保守的であった。共和主義の重力の中心は、そのために、自由帝政の時よりも第三共和政の最初の一〇年間に、より右寄りにかなり移動したのである。

ジャコバン派は、社会改革についての詳細な計画をもっていなかった。しかし彼らは、それについてはかなり語っていた。もし彼らが、一八七一年以後にも力をもっており、しかも社会主義者と結び付いていたならば、彼らはすぐに、改革に向けてのはっきりした約束をし、また、それを要求することが得策であるということに気がついたことであろう。

穏健派の中でもあまり穏健ではないフェリーやガンベッタのような人々は、他の人々以上に社会改革に関心をもっていたと思われる。彼らは一八七〇年以前から、社会改革をしばしば口にしていた。そして、もし彼らが後になって、社会改革を語る必要性がなくなったとしたら、それは、彼らの関心を刺激する極左がいなかったことに原因がある。第三共和国が、急進的かつ社会主義的になる以前に、長い間、保守的であったということは、フランスにとってよいことだったのである。

③　コミューンと社会主義

一八四八年の六月暴動のように、コミューンは、しばらくの間、社会主義を信用しなかった。とは言っても、それはほんのわずかの間であった。社会主義の諸集団が、再びフランスに姿を現わした時、それらは以前よりも強力であり、また、コミューンの記憶があるだけにより独立性を志向していた。過去において、一八四八年の初期とコミューンの間、社会主義者は過激な共和派、すなわち、ジャコバン派の後輩仲間であった。一八四八年とコミューンの時、社会主義者はジャコバン派と同盟しても利益をえられなかった。かえって、穏健共和派の激しい敵意を招いてしまった。

彼らは貴重な教訓を学んだ。いな学んだと思った。そのため彼らは、将来は自分たち自身の考えに基づいて行動しようと思った。フランスの社会主義者は後に、コミューンの兵士たちが失敗したのは、彼らが完全な社会主義者ではなかったからである、もしくは（この奇妙な理論は、フランス的というよりドイツ的に見えるが）コミューンの兵士たちは、自分たちが行っている暴動が、いかに社会主義的であるかということを知らなかったからである、という神話を作ったのである。

コミューンの兵士たちは、その中には多くのジャコバン派もいたが、漠然とした、だが重要な意味でたしかに社会主義者であった。コミューンの兵士たちは社会主義者であるということを言う多くの人々がじつは社会主義者であるという意味においてであるが。コミューンの兵士たちの多くは、社会主義を賞賛した。もっとも社会主義と言っても、その中味は異なっていた。しかし彼らは、社会主義を樹立するために、武器をとることになるとは、想像もしていなかった。彼らを鼓舞したのは、怒り、屈辱、軽蔑という感情であった。また、彼らがすぐに要求したのは、パリの政治的自治、正規軍の廃止、そしてそれにかえての国民軍という市民軍の設置であった。その市民軍は、一八七〇年以後、はっきりした形態をとるようになるプロレタリア型であった。

コミューンの兵士たちは、ヴェルサイユに対して、たとえ穏健とはいえ、社会主義的な性格をもった要求はしなかった。すなわち、彼らは、家賃と借金の支払いはもう少し延期すべきだ、ということだけを求めたのである。パリでの彼らの規則は、全体として、自分たちはすべての人が職をえて、また、食糧をもっているのを見届けるのが、自分たちの義務であると考えているだけで、所有権は尊重するというものであった。彼らは、所有者が廃止してしまった工場や作業場を、労働者がたて直すことを認めた。しかし、彼らは、いかなるものとはいえ、所有権を没収することは決してしなかったのである。

コミューンは、たしかにプロレタリアートの蜂起であった。パリ市議会に選出された人々のうちの多くは、中には例外もあったが、生まれながらにして中産階級に所属していた。しかし、選出されたのが大部分ブルジョアとはいえ、彼らに投票した人々は、プロレタリアートであった。そして当時、代議員たちと彼らの選挙区とを結び付ける関係性とか共感とかは大変に近しいものがあった。

コミューンの兵士の指導者たちは、自分たちが指揮している運動は、プロレタリア的なものであるということを完全に意識していた。そして、彼らは同じく敵はブルジョアであるということも知っていた。彼らは、自分たちが行っている戦いは、階級戦争であるということを決して疑がわなかった。彼らは、充分熟慮した末、プロレタリアートと運命を共にすることにしたのである。というのも、彼らのうち何人かは、社会主義を信じていたからである。しかし、彼らの大部分は、パリを愛し、ティエールとヴェルサイユを憎んでいたからであった。

注

（1） もちろん私は、「区（アロンディスマン）」のことを言っている。

（2） 三月一九日、中央委員会は、第一区第二区及び六区、七区、九区、一六区の一部を除くパリ全市を統制下に置いた。中央委員会は、これら各区を簡単に全面支配することができたはずである。しかし、ブルジョアがまだ暴徒に対する示威運動を

組織していた三月二二日が過ぎるまではその支配を差し控えた。

(3) 三月二六日、三、七三二人が富裕な一六区で投票した。四月一六日には、一、五九〇人だけが投票した。しかし、一二区と一八区では、その数字は、それぞれ以下のようになった。一二区では一一、三二九人（三月）から五、四二三人（四月）に落ち、一八区では一二、四四二人（三月）から一〇、〇六八人（四月）に下がった。殆んど全てがプロレタリアートの一九区においては、その数字は、一一、二八二人（三月）から七、〇九〇人（四月）に下がった。一九区の落ち込みは、簡単に言えば、選挙人たちが、つねに補欠選挙によって懐いていた関心があまり高くなかった、ということによって説明がつく。画家のクールベがコミューンに選ばれたのは、四月一六日であった。

(4) マルクスは、コミューンの兵士たちはまずパリを、つぎにフランスを、社会主義化するために努力すべきであった、と言った。彼は、コミューンの兵士たちがフランス銀行を略奪しなかったことを非難した。彼は、そのようなブルジョア的なためらいは、プロレタリア革命においては、不適切である、と言った。もしコミューンの兵士たちが、フランスかパリかいずれかに社会主義を押し付けようとしたならば、彼らは、自分たちの兵力に一大隊を加えることもできず、フランス人の一〇分の九を激怒させたであろう。コミューンの兵士たちは、自分たちが必要なものを借りることができる時、なぜフランス銀行を略奪するのか。つねに鋭敏なマルクスが、野卑なマルクス主義者のような主張をするのを見ると、気の毒になる。

(5) 五月九日までは、インターナショナルのメンバーであるジェラルダンは、公安委員会で働いた。ブランキ派のウードは、五月九日に公安委員会のメンバーに選出された。公安委員会は、五月九日までは、インターナショナルから一人、ジャコバン派から四人のメンバーによって構成された。五月九日以後は、ブランキ派から一人、ジャコバン派から四人のメンバーになった。ただひとつの組織された団体に属すという形ではなく、様々な団体に属している共和派の中でも、最も過激な共和派であるジャコバン派は、コミューンの中で、インターナショナルのメンバーやブランキ派よりも、約二倍ほど数が多かった。そしてインターナショナルのメンバーは、ブランキ派の約二倍であった。これらの割合は概数である。

※本稿は、JOHN PLAMENATZ, *The Revolutionary movement in France 1815-71* (LONGMANS, GREEN AND Co, LONDON・NEW YORK・TORONTO, 1952) の翻訳である。章・節以外の小見出しは訳者がつけた。注も最後にまとめた。㈠は、「序論・第一章　大革命」、㈡は、「第二章　復古王政」、㈢は、「第三章　七月王政」、㈣—一は、「第四章　第二共和政」の前半部分（㈠とする）、㈣—二は、「第四章　第二共和政」の後半部分（㈡とする）、㈤—一は、「第五章　第二帝政」の前半部分（㈠とする）、㈤—二は、「第五章　第二帝政」の後半部分（㈡とする）である。次回は、「第七章　フランス共和国」である。